

# 平成23年度（2期） 入学試験問題

## 国語総合・現代文

（時間 60分 配点 100点）

### 受験上の注意事項

- 【1】試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 【2】受験票、解答用紙及び机上の受験番号シールに印刷された受験番号及び氏名が間違っていれば、速やかに監督者に知らせなさい。
- 【3】この問題冊子は、本文が18ページあります。  
問題冊子の印刷が不鮮明であったり、ページが落丁・乱丁していたり、解答用紙に汚れ等がある場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 【4】机には受験票・筆記用具及び時計以外は置いてはいけません。
- 【5】監督者の指示があるまで退室はできません。
- 【6】試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。
- 【7】解答用紙はコンピュータで直接読み取るので、特に次の点に留意しなさい。
  - ①記入には HB（0.5mm）のシャープペンシルを使用しなさい。
  - ②解答用紙の **記入例** を参照して丁寧に記入しなさい。乱雑に記入したものは不利になります。
  - ③折り曲げたり、汚したりしてはいけません。
  - ④解答用紙には、答案に関係のない語句・記号を書いたり、落書きをしてはいけません。  
（問題冊子には書き込んでもよい。）
  - ⑤誤って記入した場合は、消しゴムできれいに消して書き直しなさい。
  - ⑥解答が一桁の場合には右詰めで記入しなさい。（次の例を参照しなさい。）

[例] 解答番号①の解答が4である場合  
解答番号②の解答が12である場合

解答番号	1	2	
解答欄	8 4	1 2	

↑ 左側をあける

### 注意

特に間違えやすい記入例

正

1

誤

1 1

これらは7と判断する恐れがあるので特に注意しなさい。

平成二十三年度 入学試験問題（二期）

国語総合・現代文

— 次の文章を読んで、後の問（問一～問五）に答えよ。

理想の旅のかたちとは、ガイドブックを持たずに、自由に歩く旅だろうか。ガイドブックに書かれた内容を追体験する旅は、ガイドブックを持たない旅と比較すると、常に貧しく、真なもの（the authentic）と出会えないのだろうか。こうした「ガイドブック不要論」は、ガイドブックに対する批判で繰り返されてきた。

ガイドブックの歴史は古い。 **A** エルサレム、ローマと並ぶキリスト教の三大聖地として九世紀に現れた、イベリア半島北西部のサンティアゴ・デ・コンポステーラへ向かう巡礼の旅には、『サンティアゴ巡礼案内書』というガイドブックが大きな役割を果たしていた。また江戸時代の「名所図会」や『旅行用心集』をはじめ、日本にもガイドブックの長い伝統がある。つまりガイドブックを頼りに旅立つことは、近代観光に特殊な、新しい行動ではない。

**B** ガイドブックの記述を追体験することが、問題なのだろうか。数々の「名所図会」の始祖と目される『都名所図会』の続編である『拾遺都名所図会』巻之二（一七八七年）には、「案内者」が図会を片手に「名どころ」を紹介している画がある。そこで案内を受けている旅行者は、眼鏡を手にしを乗り出して、図会を覗き込んでいる様子が描かれている。ガイドブックを読みつつ名所を見て回る旅は、決して新しい体験ではないのである。旅におけるガイドブックは眼鏡であり、『都名所図会』がユーモアを交えて描いたように、それはよく見るための道具である。そして「見る」ことは「理解する（see）」のついで、つなげることができる。

かつて松尾芭蕉は、西行法師の旅に憧れて陸奥へ旅立ち、のちに『おくのほそ道』（一七〇二年）に結実する旅をした。その芭蕉の旅は、与謝蕪村を旅枕へ誘い、小林一茶にも影響を与えた。さらに多くの有名無名の旅人たちが、そうした先人たちの旅に憧れて、旅立っていったことだろう。ガイドブックや紀行記に刺激されて旅立つこと、さらには旅の道筋を真似て歩き周ることは、小田実『何でも見てやろう』や沢木耕太郎『深夜特急』や「地球の歩き方」を読んで旅立った若者たちに限った近代の体験ではないのである。

西行や芭蕉を小田や沢木と同列に語ることは、いささか乱暴な議論かもしれない。しかし旅立つ動機の一つに真似があり、追体験があること、そして先人の旅に思いを馳せながら、ときに旅先でもガイドブックや紀行記を読みつつ旅することとは、旅行の歴史において決して珍しくない、**C** 古くからおこなわれてきた旅のかたちであったことは、重要である。なぜなら旅は、それが独り旅であっても、決して単独でおこなわれるものではないからである。先人の旅を真似て旅立つ人は、先人の「見る」ことを土台にして、そこから新たな「見る」ことを体験するだろう。いいかえれば、どれだけ精緻に真似て、また追体験しようと試みても、旅する時間と空間が異なれば、そして旅する主体が異なるのだから、きつと異なる旅の体験が待っている。

それを「見る」ことで自分がしている旅を意識できるならば、それは新しい「見る」ことへとつながる。そうして先人の旅行記が次の世代の旅行記へとつながり、さらに新たな「見る」ことが生まれて、新たな旅行のかたちが広まっていく。それは中世の巡礼の旅や、近世の俳人たちの旅にも観察でき、また小田実の『何でも見てやろう』が沢木耕太郎や「地球の歩き方」の創刊メンバーの旅心を刺激し、さらに沢木の『深夜特急』や「地球の歩き方」が、次の世代が追体験した海外旅行のかたちを生み出したように。いわば真似と追体験を推進力にして循環して生成していった足跡が旅行の歴史であり、それは人類の文化を形作る重要な歴史的過程の一部でもある。

こうして文化が生み出されていく回路の一つとして旅行の歴史に注目するとき、一人の作者が書いた紀行記とは異なる方

法で、しかしそれに劣らぬ推進力を供給してきたのが、ガイドブックというメディアである。なかでも改訂を繰り返して記述を更新していくガイドブック・シリーズは、その時々々の出発地と目的地の文化を誌面上に色濃く反映させるだけでなく、新たな真似と追体験のきっかけを生み出し、多くの人々へ提供していく。そうして新たな文化を醸成する可能性を有する点において、ガイドブックは極めて特殊なメディアである。

ガイドブックを持つて旅する人々のうち、その誌上で紹介されているルートや地点をそっくりそのまま追体験しようとする人は、むしろ少数派だろう。多くの人はガイドブックから情報を選び、それぞれの旅行に応じた利用をするものと考えられる。

だが他方で、ガイドブックに掲載されていない地方や旧跡ばかりを探し出して巡る人も、また少ないだろう。とくに海外旅行では、ガイドブックの記述が、実質的に旅行者が入手する最大限の情報となり、現地でガイドを雇うか知人でもない限り、ガイドブックの外部を想像して歩くことは稀有<sup>けう</sup>だろう。存在さえ知らない、有るかどうかさえ意識化されていない場所へ、人は向かうことはできない。するとガイドブックというメディアは、旅行者の体験を全的に縛らないが、しかしその視野の枠組みを構成し規定する、重要な情報源であるといえる。

ガイドブック・シリーズの多くは、読者から寄せられた数多<sup>あまた</sup>の投稿を情報源として活用することで、掲載内容を拡充させてきた。それは五〇年代に創刊したフロンマーの『ヨーロッパ一日五ドルの旅』と同書の日本語版を嚆矢<sup>こうし</sup>として、七〇年代の「地球の歩き方」やミニコミ誌『オデッセイ』、九〇年代の雑誌『旅行人』などがあり、とくに初期の「地球の歩き方」は「投稿が投稿を呼ぶ」メディア循環を巻き起こして、改訂するたびに多くの読者を得てきた。

読者の投稿を情報源として活用するメディアは、それがうまく循環していけば読者コミュニティを醸成し、独自の文化圏を創<sup>つく</sup>り出すことができる。これは海外旅行のガイドブックに限らず、ラジオ深夜放送や文芸雑誌などでも観察できるメディア循環の特徴であり、また読者投稿を掲載しない「ロンリー・プラネット」シリーズも、インターネット上の公式サイトでは、投稿をもとにしたコミュニティの形成に取り組んでいる。

ただしフロンマーのシリーズも「地球の歩き方」も、ある時期から読者投稿に対する態度を変化させ、掲載する投稿の数を減らし、また本文に吸収するなどして、投稿記事を周縁化させていった。その理由は異なるが、しかし結果として投稿記事を誌面から消していく一方、「買い・食い」中心の消費情報を増やしたことで、かつて「投稿が投稿を呼ぶ」ことで推進力を得ていたガイドブックは、制作者から読者へ一方的に観光情報を提供するマス・メディアに変質し、旅先の日常生活から脱文脈化していく孤人旅行を広めている。

たしかに投稿には誤った情報や、真偽の判断が難しいもの、自己宣伝に等しいものも含まれるため、発行部数が多くなるほど情報の正確さが求められ、社会的責任が大きくなる人気のガイドブック・シリーズでは、その扱いが難しくなる。しかし現在のガイドブックが、そうして失った「投稿が投稿を呼ぶ」メディア循環の回路に取って代わる、新たな推進力を得たようには見えない。かつて「読むだけでも面白い」とさえ評された初期の「地球の歩き方」のようなガイドブックが消え、今ではほとんどのガイドブック・シリーズが、より薄く・軽く・安くなる方向へ競争している。そうして「買い・食い」の消費情報ばかり掲載する、X、定期更新される有料のカタログにも見えてしまうのだ。

旅することの魅力や旅先の文化を未だ見ぬ人々へ伝える役割、そして先人の旅のかたちを伝えて真似や追体験の回路となる機能を、現代日本のガイドブックは捨て去ってしまったのだろうか。たしかにガイドブックは商業出版物でもあるが、それは文化を醸成するメディアでもある。そして優れたガイドブックは、未来において第一級の史料にもなる。

改訂を繰り返す近代的ガイドブックの祖形は、ドイツのカール・ベデカーとイギリスのジョン・マレーが一八二〇年代から三〇年代にかけてそれぞれ出版した「旅行者のための手引書」と目されている。前者は正確な地図と精緻な記述で読者の信頼を得て、二〇世紀のガイドブックの基本形を作った。そして後者は、世界中に寓居するイギリス系知識人を主な書き手に招いてシリーズ化を進め、一八八〇年代には日本編である『中部および北部の日本旅行案内』を出版した。

マレーの日本編は数年おきに改訂され、その執筆にはイギリス外交官アーネスト・サトウや博言学者バジル・ホール・チエンバレン、宣教師ウォルター・ウエストンや文学者ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）などが参加し、英語圏の旅行者だ

けでなく日本人も読むガイドブックとして名声を博した。

たとえば飛驒ひだと信州の山脈に「日本アルプス」という愛称を広めたのは、マレーの日本編にウェストンが記した紹介文によるという。また同書を読み、イギリスに興った山岳を「歩く」旅のかたちに刺激された志賀重昂しげたかは『日本風景論』（一八九四年）を発刊し、「歩く」旅を、明治期の日本へ導入した。

こうしてガイドブックを回路にした真似と追体験の Y は、新しい旅行のかたちを広めると同時に、さまざまな文化を醸成する推進力となってきた。真似と追体験の旅行は、常に退屈で貧しい体験だけを提供するとは限らない。それは後世へつながる、文化の土壌を生成する重要な実践の場にもなりうる。

文化とは、博物館や学校などで保存され、教えられる過去の知だけではない。様々な人々がそれを生き、日常生活において実践していくことで編み成され、伝えられていく社会的文脈の結晶体である。そうした文化を生き、編み成していく主体になる実践の一つとして、いまも旅行は、貴重な価値を有すると考えられる。

脱文脈化する「買い・食い」中心の短期旅行だけでは、今後も日本の海外旅行は衰えていき、やがて海外旅行の歴史も失われてしまうだろう。歴史と文化が Y する回路としてのガイドブックの可能性は、「歩く」旅の可能性と同じく、未だ尽くされていない。

（山口誠著『ニッポンの海外旅行―若者と観光メディアの50年史』に基づく）

問一 空欄   に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を記

入せよ。解答番号は、

- 1 A たとえば B さらに C そして
- 2 A しかし B さらに C むしろ
- 3 A たとえば B ならば C むしろ
- 4 A しかし B ならば C そして

問二 傍線部「なぜなら旅は、それが独り旅であっても、決して単独でおこなわれるものではないからである」において、

筆者は旅をどのようにとらえているか。その説明として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を記

入せよ。解答番号は、

- 1 旅は、『都名所図会』の旅人のように、案内者に直接案内を受けることが欠かせないものである。
- 2 旅は、先人となる旅人たちの書いた手引書の影響を受けず存在するものである。
- 3 旅は、土地の人々とのふれあいなどといった、他人との関わり（かか）を避けるべきものである。
- 4 旅は、それをおこなう動機や情報源などが、先人の旅と切り離せないものである。

問三 空欄  に入る最も適切な言葉を、次の1～4の中から一つ選び、その番号を記入せよ。解答番号は、

- 1 読者投稿で構成された現在のガイドブックは
- 2 画一化された現在のガイドブックは
- 3 情報の正確さが失われた現在のガイドブックは

4 多様化したニーズに応える現在のガイドブックは

問四 空欄 Y に入る語句として最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選び、その番号を記入せよ。

解答番号は、

4

- 1 対立      2 前進      3 輪廻<sup>りんね</sup>      4 乖離<sup>かいり</sup>      5 循環

問五 本文の内容と合致するものを、次の1～6の中から二つ選び、その番号を記入せよ。順序は問わない。

解答番号は、

5

6

1 ガイドブックは、旅行者の行動を制限する可能性はあるものの、情報を選び利用することのできる重要なメディアである。

2 「地球の歩き方」のようなガイドブックの多くは、豊富な情報や消費情報を提供するため、最近では厚く高価になる傾向にある。

3 旅をする上での理想は、ガイドブックをできるだけ持たずに自由に歩くことであり、ガイドブックに書かれた内容を追体験する旅行はできるだけ避けるべきである。

4 「旅行者のための手引書」の日本編は、外国の旅行者のみならず日本人の旅行者にも多くの刺激を与えたが、日本における新たな旅の形を生み出すことはなかった。

5 人気のあるガイドブック・シリーズは、内容の正確さについて社会的責任が大きくなるため、最近では読者投稿の掲載を増やす傾向にある。

6 過去の旅人たちの経験を追体験する旅行は、退屈に感じる可能性はあるものの、後世へつながる文化の土壌を生み出すものになりうる。

二 一の文章を読んで、後の問（問一～問六）に答えよ。

ア 書くことが、筆蝕することであるということは、書くことは全身体的な力技であるという点に依拠して文学や書という芸術が生まれてきた。書き手の全身体的な力技であるという点に依拠して文学や書という芸術が生まれてきた。

ひとりのプロの作家や評論家の書字現場を見ればよい。よくよく観察すれば、紙をにらみつけ、時には、口唇をゆがめ、歯をくいしばり、また足の指先まで力が入り、文の切れ目で頭を上げたりしながら、そのことによつて、筆記具の尖端には力がこめられたり、時には抜かれたりしながら、全身体的力量をこめて言葉がつむぎ出されていく。「彫心」の文章も「鏤骨」の文章もここに生まれるのだ。

現代のパフォーマンズ書道家が書字するときの、目を見開き、奇声を上げ、腰を支点にオーバーアクションする身体の動きは、この書字の姿を、クローズアップし、大袈裟にしたものである。作家や評論家はそれほど大袈裟なものではないが、微細に観察すれば、同様の動作をともしつつ書いていることが目撃できるはずである。

この筆尖と紙との接触面での「筆蝕」が言葉をつむぎ出していくのだから、筆蝕が変われば文章は変わり、文体は変わる。万年筆と鉛筆はむろんのこと、2Hの鉛筆で書く文章と6Bの鉛筆で書く文章とは明らかに異なるものである。筆蝕が文体をつくり、文体がそれにふさわしい筆蝕を強要する。ここに、いわゆる筆記具の趣味、筆記具と書き手の相性というものが存在する。書き手は単に好みで筆記具を選んでいるようだが——事実その通りなのだ——、文体が確立するにつれて、その文体に筆記具は選ばれるものなのだ。

イ このように「書く」ということが全身体的なものであり、全身体的思考と相似的なものであるからくりを知ってしまえば、ワープロを使った作文がどのような文章と文体をもつかは明らかだろう。それは肉筆で書く時のように、もはや文をつむぎ出す、相似的な全身体的思考ではない。何よりもあまり力がいらす——それゆえ手も疲れず——、指先でキイに軽く触れていくばかりである。この姿は文字を印字していくタイプピストの姿である。いやそう言つてはタイプピストに失礼だ。かつての

タイピストの印字には強く打てば黒く太い字画が生まれるという相似（同ジカル）的な関係があった。だからこめた力も空（むな）しくどこかに霧消するワープロ作文者の思考は、書字的ではなく、むしろ発声的いやおしゃべりとおしゃべりの編集的思考である。

これが、ワープロ作文の文章と文体の秘密である。作者の力が十全に発現されず、また空回りする軽いテンポ、軽いリズム、軽いのりの、デジタルな文章と文体が生まれるのである。それはともすると、手の内に入っていないむずかしい言葉も、脈絡を欠いて「ポンポン」飛び出す無責任な「いけいけ」文体ともなる危険を秘めているのである。つまり、自制がきかず浮遊するような文体や奇想天外な文章が多くなる傾向が強いのである。

筆蝕をともない、力技を必要とし、絶えず社会的、歴史的重力を意識せざるをえないアナログな書字では、疲労して力が続かなくなり、また筆蝕にひっかかり、筆蝕のひっかかりによって、十分に手の内に入っていない言葉は、詰まり、消えてしまうことも多い。しかしそれゆえにこそ、自制的な思考と文章と文体が定着される。

それにもっと決定的なことを言ってしまうと、「文字」とは、人間が手にした筆記具の先端と、紙を表層とする対象との摩擦によって生まれてくるもので、点画あるいはそれ以前の書字の微粒子的律動たる筆蝕を筆順と語順に従うリズムと構成によって定着したものにほかならないから、それらを欠いた印刷文字は「代用文字」ではあっても文字ではない。ワープロ作文は代用文字による代用文、つまり声が汚ないから、喉（のど）が疲れるからと言って自らの声で話す代わりに人工発声機のキイをたたいて、機械にしゃべらせているようなものなのだ。

現代の文学や批評の軽浮さは目に余る。空想小説や推理小説やロマンチックな恋愛小説が氾濫（はんらん）するのは、むしろ現在という時代から来るわけだが、ワープロがそれを加速している側面も否めない。ビジネス文書や技術論文など前もってパターン化した枠組のある報告書はともかく、ワープロの書字（ウ）⇨打字（ウ）というのは、構造的に満足な文学を生みはしない。その意味で、家庭と教育の場と表現の場からはワープロは隔離し、追放したほうがよいのである。

さて、書字が力技である筆蝕をとまなうことを認めたとしても、それは「行為言語論」「行為文学論」に過ぎぬではないかという反論がある。

筆蝕は書字によって言葉を引き出す原因力であり、かつ書字された全体を、まさにその場で支えている存在そのもの、またその姿である。「文字を書き」「文字を読む」というようなことは現実にはありえない。「言葉を書き」「言葉を読む」ものだからだ。その意味で、文字などというものは現実の表出や表現の場には存在しない。我々が通常「文字」と呼んでいるもの——それは言葉の原因力であり同時に存在そのものであるところの言葉のかたまり、言葉の肉体である。

目を見つめ合って「さよなら」と言った言葉と、帰りかけた背中に向かって「さよなら」と言う言葉と、電話で「さよなら」と言った言葉とは、言葉の意味が違ふ。逆に、<sup>エ</sup>目を見つめ合って「さよなら」と言った言葉と、「うん」と静かに頷いた言葉とが限りなく意味が近いということもありうる。なぜか。言葉にはその精神だけではなく、肉体と環境が必要だからだ。語気、語調、さまざまな場の関係——それらぬきに言葉は存在しない。話された言葉が肉体と環境を必要とするように、書かれた言葉にも肉体と環境が必要である。その書かれた言葉の肉体こそが筆蝕であり、文字である。筆蝕とは実際に、言葉の肉体であり、書とは言葉の肉体と環境である。

筆蝕が  A を生み、  A が  B を統御し、  A が終われば  B が終わるということは、  C が  D を生み、  D が  C を統御し、  D が終われば  C も終わるということと等価である。肉体は裏返った精神であり、精神は裏返った肉体であるように、筆蝕は裏返った言葉であり、言葉は裏返った筆蝕である。

(石川九楊著『書とはどういう芸術か』に基づく)

問一 傍線部ア「書くことが、筆蝕することである」ということは、書くことは全体的な力技であるということである」に

ついて、この定義に合う文字にはどのようなものがあるか。その組み合わせとして不適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を記入せよ。解答番号は、7

- 1 パフォーマンス書道家によって書かれた文字 ・ 万年筆によって書かれた文字
- 2 ワードプロを使って書かれた文字 ・ 6Bの鉛筆で書かれた文字
- 3 万年筆によって書かれた文字 ・ かつてのタイピストによって打たれた文字
- 4 2日の鉛筆で書かれた文字 ・ パフォーマンス書道家によって書かれた文字

問二 傍線部イ「ワードプロを使った作文がどのような文章と文体をもつかは明らかだろう」について、筆者はワードプロを使

って書かれた文章と文体はどのようなものだと述べているか。その説明として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を記入せよ。解答番号は、8

- 1 未熟な作者による自制的な思考を欠いた荒唐無稽なストーリーが展開される文章と文体。
- 2 むずかしい言葉が軽いテンポと軽いので唐突に出てくるような無責任な文体や奇想天外な文章。
- 3 作者の力量が不十分であるばかりに脈絡を欠いた言葉が空回りしているような「いけいけ」の文章と文体。
- 4 見栄えのいい美辞麗句を脈絡を考えずリズムカルに並べただけの無責任な文体やアナログな文章。

問三 傍線部ウ「ワードプロの書字＝打字というのは、構造的に満足な文学を生みはしない」とあるが、それはなぜか。その

理由として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を記入せよ。解答番号は、9

1 文学とは書き手の全体的な力技によって生み出されるものであるが、ワードプロはそのような力技を必要とはしないから。

- 2 軽くキイに触れるだけで生み出されるワープロの文字は、書き手の個性が反映されることもなくアナログ的であるから。
- 3 「書く」ということは全身体的思考と相似的な関係を持っているが、タイピストの印字と同様にワープロの打字はどのような関係とは無縁であるから。
- 4 筆記具は書き手の好みで選ばれるのではなく、文体が確立するにつれてその人の文体によって選ばれるものであるから。

#### 問四

傍線部「目を見つめ合って『さよなら』と言った言葉と、『うん』と静かに頷いた言葉とが限りなく意味が近いということもありうる」とあるが、どのような点において「意味が近いということもありうる」のか。その説明として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を記入せよ。解答番号は、10

- 1 この「さよなら」と「うん」の二つの言葉は、使われた場面や筆蝕は異なっているが、その意味や用法は似ているという点。
- 2 この「さよなら」と「うん」の二つの言葉は、語気や語調、さまざまな場の関係はもちろんのこと、筆蝕が似ているという点。
- 3 この「さよなら」と「うん」の二つの言葉は、その精神だけではなく、語気や語調、さまざまな場の関係が似ているという点。
- 4 この「さよなら」と「うん」の二つの言葉は、語気や語調、さまざまな場の関係は異なっているが、その意味や用法が似ているという点。

問五 空欄 A D に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を

記入せよ。解答番号は、11

- |   |      |      |      |      |
|---|------|------|------|------|
| 1 | A 言葉 | B 筆蝕 | C 肉体 | D 精神 |
| 2 | A 精神 | B 言葉 | C 筆蝕 | D 肉体 |
| 3 | A 精神 | B 筆蝕 | C 言葉 | D 文字 |
| 4 | A 言葉 | B 肉体 | C 精神 | D 筆蝕 |

問六 本文の内容と合致しないものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を記入せよ。解答番号は、12

- 1 万年筆や鉛筆といった筆記具と紙との摩擦によって文体はつくられ、つくられた文体はそれにふさわしい筆記具を選ぶ。
- 2 自制的な文章と文体は、筆蝕をとめない書き手の全身体的な力技を必要とするアナログな書字によってもたらされるものである。
- 3 「文字」とは筆蝕によって生まれてくるものであり、筆蝕をとめない印刷文字は「代用文字」ではあっても「文字」ではない。
- 4 「筆蝕」は筆記具と紙との接触による摩擦によって生まれ、語気や語調、さまざまな場の関係によって変化するものである。

三 次の各問（問一～問六）を読んで、それぞれの指示に従って答えよ。

問一 次のA～Dの各問の傍線部のカタカナと、その後の1～4の傍線部のカタカナが同じ漢字となるものをそれぞれ一つ

ずつ選び、その番号を記入せよ。解答番号は、A

13

・ B

14

・ C

15

・ D

16

A ショウ進料理をいただく。

1 四回転ジャンプにセイ功する。

2 厳しいセイ存競争にさらされる。

3 セイ密機械の取扱いに注意する。

4 セイ方形のタオルを購入する。

B 土タン場で同点に追いつく。

1 階タンを駆け上がる。

2 花タンにコスモスの種をまく。

3 野球はタン体競技である。

4 道路が寸タンされた。

C 先生にエ積をしてすれ違う。

1 祖母をカイ護する。

2 建物をカイ築する。

3 カイ中電灯を手にする。

4 編集カイ議に出席する。

D 紙数が尽きたのでカツ愛する。

1 飛行機がカツ走路に入る。

2 群雄カツ扱の時代になる。

3 聴衆のカツ采さいを浴びる。

4 株式市場がカツ況を呈する。

問二 次のA～Dの各群において、漢字の読み方（カタカナ表記）が正しくないものはどれか。それぞれ1～4の中から一つずつ選び、その番号を記入せよ。解答番号は、A  ・ B  ・ C  ・ D

- A
- |   |          |
|---|----------|
| 1 | 足袋（タビ）   |
| 2 | 干潟（ヒガタ）  |
| 3 | 全幅（ゼンフク） |
| 4 | 悪寒（オカン）  |

- B
- |   |         |
|---|---------|
| 1 | 悼（イタ）む  |
| 2 | 提（サ）げる  |
| 3 | 賜（タマワ）る |
| 4 | 寂（スタ）れる |

- C
- |   |           |
|---|-----------|
| 1 | 為替（カワセ）   |
| 2 | 遊説（ユウゼツ）  |
| 3 | 偏重（ヘンチョウ） |
| 4 | 産着（ウブギ）   |

- D
- |   |          |
|---|----------|
| 1 | 拘泥（コウデイ） |
| 2 | 謁見（エツケン） |
| 3 | 普請（フシン）  |
| 4 | 赤銅（シヤドウ） |

問三 次のA～Cの文を目上の人やあまり親しくない人に対して用いる場合に、最も適切な表現はどれか。それぞれ1～4の中から一つずつ選び、その番号を記入せよ。解答番号は、A  ・ B  ・ C

A お客様、こちらのカードは（1）ご利用されません（2）ご利用してただけません（3）ご利用になられませんか（4）ご利用いただけません。

B 社長、取引先の石田様が（1）参りました（2）お見えになりました（3）いらつしやられました（4）お見えになりました。

C 先生の（1）ご拙説（2）ご拝説（3）ご勤説（4）ご高説を拝聴したく存じます。

問四 次のA、Cの  に入る漢字一字と四字熟語の意味として最も適切なものを、それぞれ1、4の中から一つずつ選び、

その番号を記入せよ。解答番号は、A  24 ・ B  25 ・ C  26

A 内  外患

- 1 憂 内にも外にも心配ごとがあること。
- 2 勇 心の内では勇ましいが、行動に移せないこと。
- 3 雄 精神の雄々しきで困難を乗り越えること。
- 4 幽 心にはむなしき、身体には病があること。

B 優柔不

- 1 弾 心弾むような日々が送れず、心がふさぐこと。
- 2 段 段取りどおりに進まない物事に対して柔軟に対応すること。
- 3 断 ぐずぐずして決断力がないこと。
- 4 暖 過ごしやすきはあるが、やや暖かさに欠ける気候のこと。

C 流言  語

- 1 悲 世間で言われている悲しい話題。
- 2 火 世間で言われている攻撃的な意見。
- 3 卑 世間で言われている卑しい言葉。
- 4 飛 世間で言われている根も葉もないうわさ。

問五 次のA・Bにおいて、傍線部の漢字の意味が他と異なるものを、それぞれ1～4の中から一つずつ選び、その番号を

記入せよ。解答番号は、A  ・ B

A 1 使用 2 用途 3 用法 4 作用

B 1 白雲 2 白目 3 白状 4 白紙

問六 次のA～Cの言葉の意味として最も適切なものを、それぞれ1～4の中から一つずつ選び、その番号を記入せよ。

解答番号は、A  ・ B  ・ C

A 老少不定

1 年をとり、経験のある人も失敗しうること。

2 老人は家庭での身の置き場がないこと。

3 老人から先に寿命が尽きていくこと。

4 人の寿命に老若の定めのないこと。

B 疾風に勁草を知る

1 苦難にあつてはじめて、その人の節操の堅さや意志の強さがわかるということ。

2 忙しい中にもわずかな暇はあるものだということ。

3 強い風の中では、どんな草花も枯れてしまうということ。

4 時代や社会がめまぐるしく変化し、国家の形勢が大きく転換するということ。

C  
古い木に花

- 1 一度衰えたものがまた栄えることのたとえ。
- 2 勢力の強いものが栄えるとは限らないことのたとえ。
- 3 色々な苦勞を乗り越えてきた人は芯しんが強いことのたとえ。
- 4 良い素質を持った人が、年齢にかかわらずなく活躍することのたとえ。

〔国語の問題は以上です。〕